仙台市文化財調査報告書第293集

南小泉遺跡

－第43次発掘調査報告書－

２００５年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第293集

南小泉遺跡

－第43次発掘調査報告書－

２００５年３月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろから多大な御協力を賜り、まことに感謝にたえません。

若林区の南小泉・遠見塚地区周辺は、遠見塚古墳をはじめとして市内でも遺跡が数多く分布する地域であり、そのなかでも南小泉遺跡は、弥生時代から奈良・平安時代にかけての大規模な集落遺跡として知られ、仙台市を代表する遺跡のひとつです。

今回の発掘調査は、遠見塚古墳の南側に位置する遺跡の中央部で行われ、弥生土器の出土とともに、中世から近世にかけてと考えられる畑跡が発見され、この遺跡を考える上で貴重な成果が得られました。

先人たちの残した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ次の世代に継承していくことは、現代に生きる私たちの大きな責務であると考えております。また、文化財の保護につきましては、地域の皆様の深い御理解と御協力が必要となります。

その意味でも、今回の調査成果が地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、多くの方々に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行に際しまして、御協力くださいました皆様に深く感謝申し上げる次第です。

平成17年３月

仙台市教育委員会
教育長　阿 部 芳 吉

例　　言

1．本書は仙台市若林障害者福祉センター建設に伴う南小泉遺跡第43次発掘調査の報告書である。
2．発掘調査は、仙台市教育委員会の指導・監督のもとに加藤建設株式会社が行った。
3．本書の作成・編集は、仙台市教育委員会文化財課　斎野裕彦、加藤建設株式会社　戸堀　功・内田　仁が行った。
4．本書の執筆は斎野裕彦の責任と指導のもとに、加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部が行った。
　加藤建設内の分担
　・第1章　2，第2章　1，第3章　1　(1)，第3章　2　(1) …… 戸堀
　・第1章　3，第2章　2，第3章　1　(2)(3)，第3章　2　(2)(3)，第3章　3　…… 内田
　・第4章 …… 戸堀・内田
5．本書に係わる一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．本書の第1図の地形図は国土地理院発行の1：25000「仙台東南部」を使用した。
2．本書の第2図は仙台市発行の1：5000「仙台市都市計画図基本図　X-QE51-2」を使用した。
3．本調査を実施するにあたり国土座標（日本測地系）に則り5ｍ×5ｍのグリッドを設定した。国土座標の数値は日本測地系により調査区全体図（本文第3図）に示した。B.M.は仙台市が計画地内に設置した基準点を使用した。
4．グリッドの名称は、そのグリッドの北西交点を通るライン名を組合わせて使用した。
5．方位は真北を示す。断面図の標高は海抜高を示す。
6．小溝状遺構群には、各小溝毎に小溝1、小溝2、・・・と番号をつけた。
7．層位名は基本層位をローマ数字、その中でも細分されるものについては、アルファベットの小文字を使用している。
8．本書中の土色については「新版標準土色帖（小山正忠・竹原秀雄　1996)」に基づいた。
9．本書で使用した遺物略号は次のとおりで、それぞれ種類別に番号を付した。
　B：弥生土器　C：土師器（ロクロ不使用）　I：陶器、土師質土器　K：石器・石製品　N：金属製品
10．遺物実測図の縮尺は　土器・角釘1／2　石器2／3　である。

本　文　目　次

第１章　調査の概要 …… 1
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査要項 …… 1
　３．遺跡の立地と環境 …… 3

第２章　調査方法と基本層位 …… 4
　１．調査の方法と経過 …… 4
　２．基本層位 …… 5

第３章　検出遺構と出土遺物 …… 8
　１．Ⅲa層の調査 …… 8
　　(1) 小溝状遺構群 …… 8
　　(2) 出土遺物 …… 10
　　(3) 遺構の時期 …… 10
　２．Ⅳa層の調査 …… 12
　　(1) 小溝状遺構群 …… 12
　　(2) 出土遺物 …… 14
　　(3) 遺構の時期 …… 16
　３．遺構外出土遺物 …… 16

第４章　総　　括 …… 18

挿図目次

第1図　周辺の遺跡 …… 2
第2図　調査対象地位置図 …… 3
第3図　グリッド配置図 …… 4
第4図　基本層位柱状図 …… 5
第5図　断面図作成位置図・深掘区位置図 …… 5
第6図　北西壁土層断面図 …… 6
第7図　東西土層断面図
　・深掘区東西土層断面図 …… 7
第8図　Ⅲa層小溝状遺構群検出状況図 …… 8
第9図　Ⅲa層小溝状遺構群平面図 …… 9
第10図　Ⅲa層小溝状遺構群断面図 …… 9
第11図　Ⅲa層出土遺物（1） …… 10
第12図　Ⅲa層出土遺物（2） …… 11
第13図　Ⅳa層小溝状遺構群検出状況図 …… 12
第14図　Ⅳa層小溝状遺構群平面図 …… 13
第15図　Ⅳa層小溝状遺構群断面図 …… 14
第16図　Ⅳa層出土遺物 …… 15
第17図　遺構外出土遺物 …… 17

表目次

第1表　Ⅲa層小溝状遺構群計測表 …… 10
第2表　Ⅳa層小溝状遺構群計測表 …… 14
第3表　基本層位出土遺物数量表 …… 17

写真目次

写真1　Ⅲa層小溝状遺構群検出状況（北から） … 19
写真2　Ⅳa層小溝状遺構群検出状況（南西から） … 19
写真3　Ⅲa層小溝状遺構群完掘状況（南西から） … 20
写真4　Ⅲa層小溝1～4完掘状況（西から） …… 20
写真5　Ⅲa層小溝5～8完掘状況（西から） …… 20
写真6　Ⅲa層小溝9a，9b，10，11完掘状況
　（西から） …… 20
写真7　作業風景 …… 20
写真8　Ⅳa層小溝状遺構群完掘状況（北から） … 21
写真9　Ⅳa層小溝1～5完掘状況（西から） …… 21
写真10　Ⅳa層小溝6～9完掘状況（西から） …… 21
写真11　Ⅳa層小溝10～13完掘状況（西から） …… 21
写真12　Ⅳa層小溝14～20完掘状況（西から） …… 21
写真13　Ⅲa・Ⅳa層小溝状遺構群
　北西壁土層断面（北東から） …… 22
写真14　北西壁基本層位（1）（南東から） …… 22
写真15　北西壁基本層位（2）（南東から） …… 22
写真16　東西基本層位（南から） …… 22
写真17　深掘区東西土層断面（北から） …… 22
写真18　北西壁土層断面 1（南東から） …… 23
写真19　北西壁土層断面 2（南東から） …… 23
写真20　北西壁土層断面 3（南東から） …… 23
写真21　北西壁土層断面 4（南東から） …… 23
写真22　北西壁土層断面 5（南東から） …… 23
写真23　北西壁土層断面 6（南東から） …… 23
写真24　北西壁土層断面 7（南東から） …… 23
写真25　北西壁土層断面 8（南東から） …… 24
写真26　北西壁土層断面 9（南東から） …… 24
写真27　北西壁土層断面10（南東から） …… 24
写真28　北西壁土層断面11（南東から） …… 24
写真29　北西壁土層断面12（南東から） …… 24
写真30　北西壁土層断面13（南東から） …… 24
写真31　出土遺物（1） …… 25
写真32　出土遺物（2） …… 26

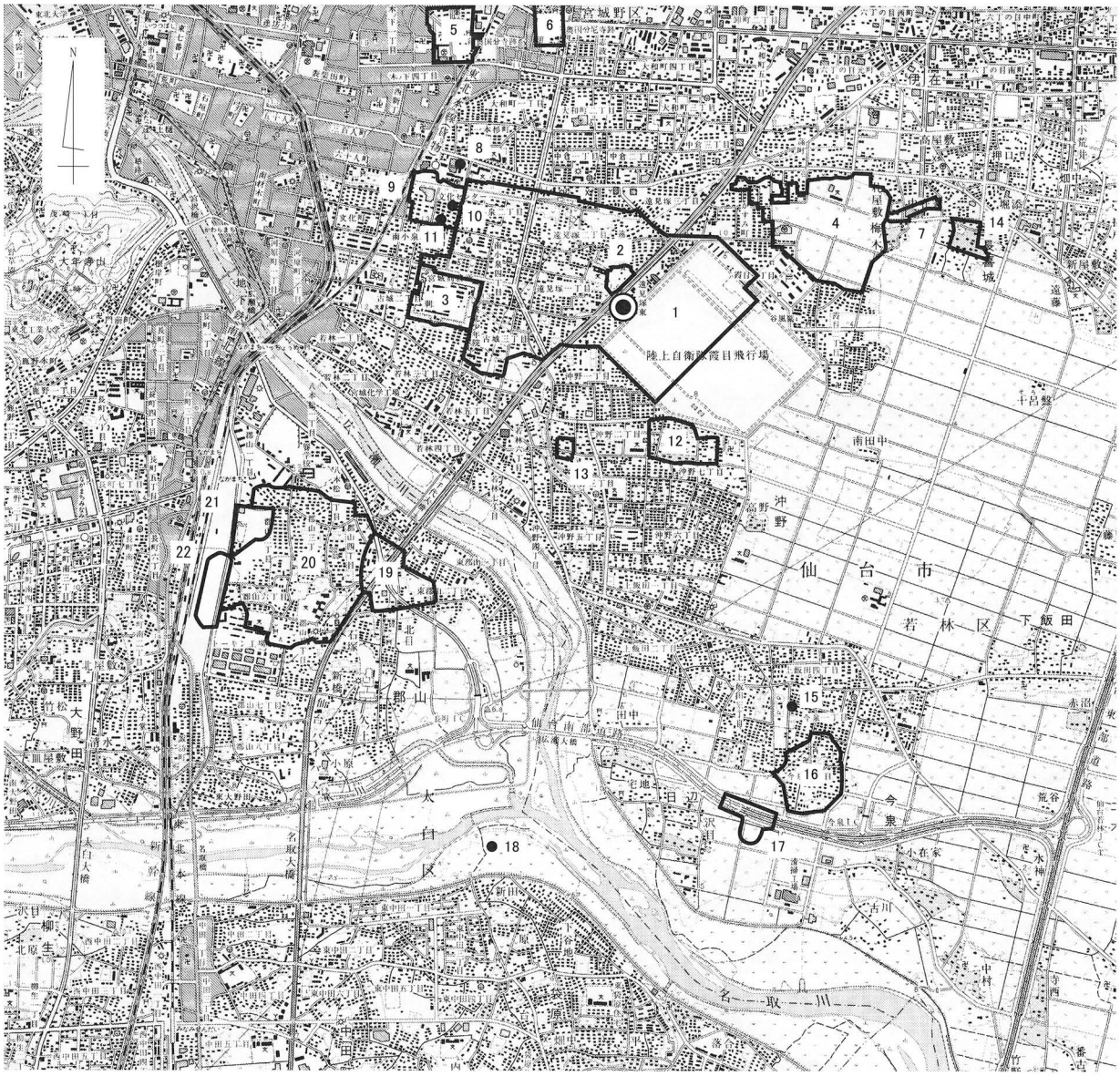
第１章　調査の概要

１．調査に至る経緯

平成16年７月上旬、南小泉遺跡内に計画された仙台市若林障害者福祉センター建設について、仙台市教育委員会と事業主管局の健康福祉局の間で事前協議が行われた。協議後、建物位置が決定していなかったことから、建設予定地全域を対象として、平成16年７月22日から同年７月29日に確認調査が行われた。確認調査では、20ｍ×３ｍのトレンチが３箇所（AからCトレンチ）設定された。調査の結果、建設予定地の西半部で遺構、遺物が検出された。遺構は、Ⅲ層とⅣ層の調査で、それぞれ畑の耕作痕と考えられる小溝状遺構群が検出され、時期は明確ではないが、古墳時代以降と推定された。遺物は、弥生土器と土師器が出土した。その後、建物位置が建設予定地の中央部から西側に決定されたことから、西半部を対象として記録保存を目的とした本調査を行うこととなった。

２．調査要項

遺 跡 名：南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021　仙台市文化財登録番号C-102）
所 在 地：仙台市若林区遠見塚東159-3,71-5外
調査主体：仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）
（1）確認調査
調査担当：調査係主査　佐藤甲二
調査係主査　主浜光朗
調査係主任　斎野裕彦
調査期間：平成16年７月22日～平成16年７月29日
調査面積：180㎡
（2）本調査
調査担当：調査係主査　佐藤甲二
調査係主査　主浜光朗
調査係主任　斎野裕彦
調　査　員　戸堀　功（加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部）
調査補助員　内田　仁（加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部）
調査期間：平成16年11月10日～平成16年12月15日
調査面積：425㎡（うち確認調査面積：74㎡）

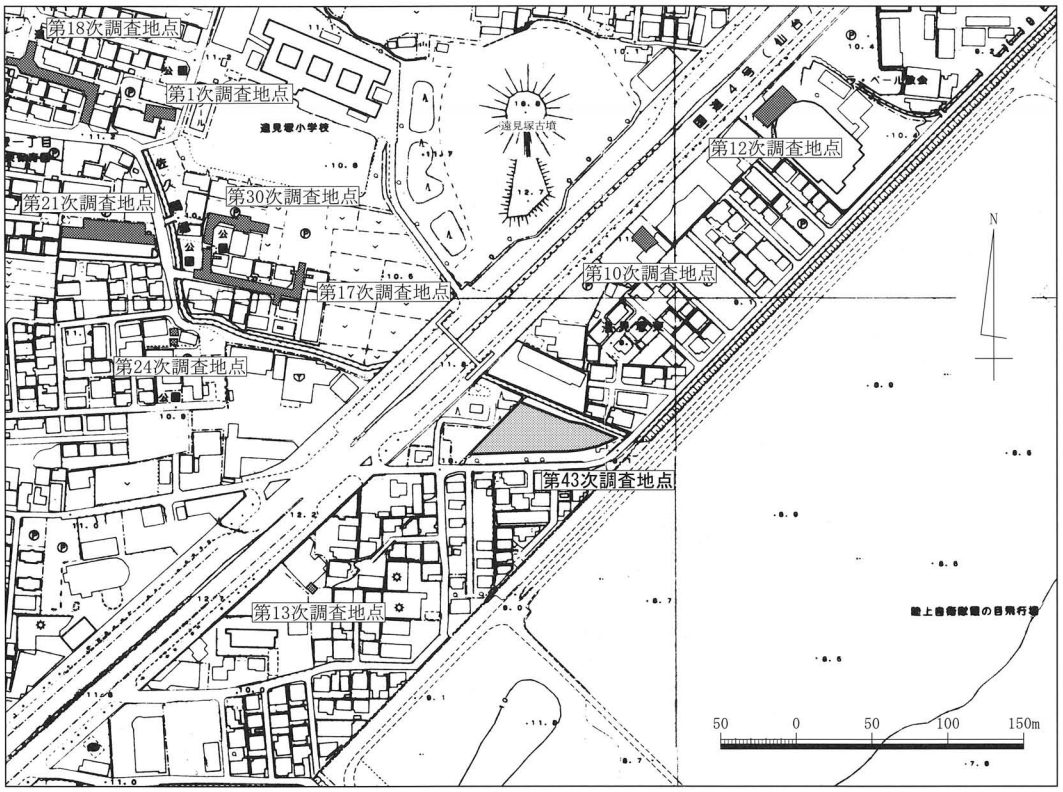


遺跡地名表

No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	南小泉遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～近世
2	遠見塚古墳	古墳	自然堤防	古墳
3	若林城跡	城館跡	自然堤防	古墳～近世
4	仙台東郊条里跡	条里跡	後背湿地	古代
5	陸奥国分寺跡	寺院跡	段丘	古代
6	陸奥国分尼寺跡	寺院跡	段丘	古代
7	中在家南遺跡	集落跡・河川跡	後背湿地	弥生～近世
8	法領塚古墳	古墳	自然堤防	古墳
9	養種園遺跡	屋敷跡・包含地	自然堤防	縄文・古代～近世
10	蛇塚古墳	古墳	自然堤防	古墳
11	猫塚古墳	古墳	自然堤防	古墳

No.	遺跡名	種別	立地	年代
12	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世
13	神柵遺跡	官衙・包含地	自然堤防	縄文～古代
14	長喜城館跡	城館跡	自然堤防	中世
15	梅塚古墳	古墳	自然堤防	古墳
16	今泉遺跡	集落跡・城館跡	自然堤防	縄文～近世
17	高田B遺跡	集落跡・水田跡	後背湿地	縄文～近世
18	大塚山古墳	古墳	河川敷	古墳
19	北目城跡	城館跡	自然堤防	中世・近世
20	郡山遺跡	集落跡・官衙・寺院跡	自然堤防	縄文・古墳・古代
21	西台畑遺跡	散布地・包含地	自然堤防	縄文～古代
22	長町駅東遺跡	散布地・建物跡	自然堤防	弥生～古代

第1図　周辺の遺跡



第２図　調査対象地位置図

３．遺跡の立地と環境

南小泉遺跡は仙台市の南東部に位置し、広瀬川左岸に形成された自然堤防に立地する。この地点は仙台市の南縁を流下する名取川との合流地点よりやや北東側にあたり、遺跡内の標高は約７～14mを測る。遺跡の範囲は東西約1.8㎞、南北約１㎞、面積約146haである。調査地点は、南小泉遺跡のほぼ中央部にあたり、国道４号線仙台バイパスを挟み史跡遠見塚古墳の真南に位置する。

南小泉遺跡の周辺遺跡を見ていくと、弥生時代では中期中葉の桝形囲式土器とともに大量の木製品が出土した中在家南遺跡が北東側に位置している。また南東側には中在家南遺跡と同様に弥生時代中期の桝形囲式土器をはじめ、石器、木製品等の遺物が大量に出土した高田B遺跡がある。高田B遺跡では大量の遺物の他に、同時期の河川跡や水田跡も検出されている。古墳時代では、南小泉遺跡の範囲内に東北地方でも最大級の前方後円墳である遠見塚古墳を有し、近隣には法領塚古墳、猫塚古墳等のさまざまな古墳が存在している。７世紀の中頃になると多賀城創建以前の官衛である郡山遺跡Ⅰ期官衛が広瀬川の対岸に造られる。８世紀の中頃には南小泉遺跡の北側に陸奥国分寺・国分尼寺が造営される。中世ならびに近世においては若林城跡と沖野城跡が隣接し、東方には長喜城館跡、南方には今泉城館跡がある。

第２章　調査方法と基本層位

１．調査の方法と経過

調査区設定の後、重機で表土掘削をおこなった。遺構確認面をⅢ層上面とし、人力による精査及び調査区全体の基本層位の確認をおこなった。その結果、Ⅲ層及びⅣ層が、それぞれⅢa層とⅢb層、Ⅳa層とⅣb層に細分され、Ⅲa層、Ⅳa層を畑跡の耕作土と判断し、調査を開始した。Ⅲa層では11条、Ⅳa層では20条から構成される小溝状遺構群が検出された。

遺構調査終了後、Ⅴ層上面までの掘り下げをおこない、下層調査として調査区東側に深掘区を設定し、Ⅸ層までの掘削をおこなった。調査区東西ベルト、北西壁面については土層断面観察及び記録作業をおこなった。

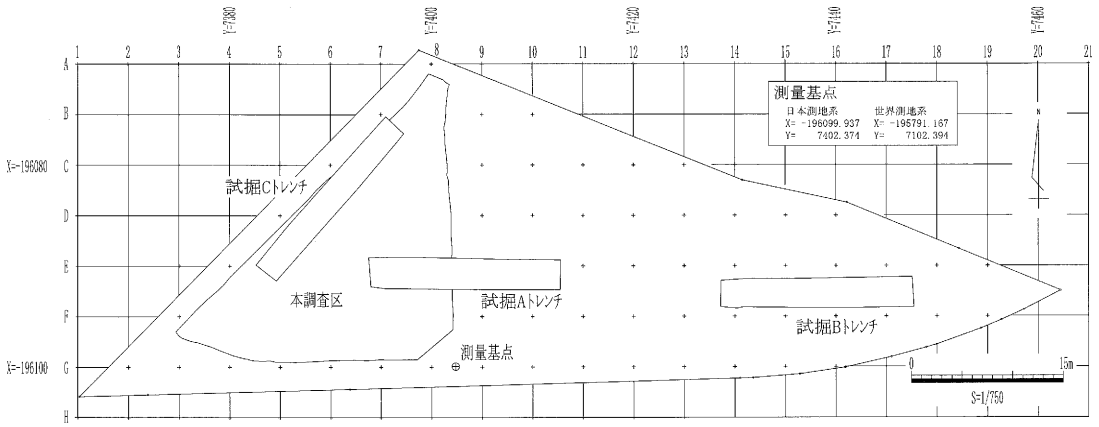
調査対象地には、仙台市が調査区内に設置した基準点からトラバースを行い、５ｍ×５ｍの調査グリッドを設定した。座標は国家座標（日本測地系座標）とし、Ｘ＝-196070、Ｙ＝7365をＡ１グリッド北西原点とした。調査区内に木杭によるグリッドを設置し、調査区外に測量基点の設置をおこなった。

計測作業は、平面図については、前述の測量杭を使用しての電子平板実測とし、断面図については、人力による実測とした。縮尺は１/20を原則とし、B.M.は確認調査時の9.86mを使用した。

出土遺物は、遺物台帳の管理のもとに取り上げをおこなった。Ⅲa層、Ⅳa層出土遺物は、光波測量器の計測により地点と標高を記録し、他の遺物は、調査グリッドによる層位毎の一括取り上げ遺物とした。

発掘調査は、平成16年11月10日～同年12月15日（実働15日間）におこなった。その経過は下記のとおりである。

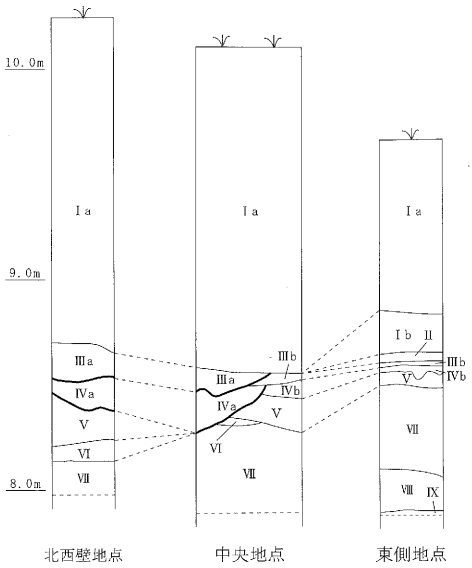
11月10日：発掘資機材搬入、仮設設置、調査区設定。
11月11日：表土掘削開始。
11月16日：表土掘削終了。
11月17日：攪乱除去、Ⅲ層検出作業開始。
11月18日：攪乱除去、Ⅲ層検出作業。
11月22日：攪乱除去、Ⅲ層検出作業。
11月24日：Ⅲ層検出作業。調査区内グリッド杭設置。
11月25日：Ⅲ層上面精査及び遺構確認。遺物取り上げ。
11月26日：Ⅲa・Ⅲb層検出状況写真撮影。
11月29日：Ⅲa層掘り下げ及び小溝状遺構群検出。
11月30日：Ⅲa層小溝状遺構群検出及び調査。
12月１日：Ⅲa層小溝状遺構群写真撮影及び記録作業。
12月２日：Ⅲb層掘り下げ及びⅣ層検出作業開始。
12月３日：Ⅳa・Ⅳb層検出状況写真撮影。
12月６日：Ⅳa層小溝状遺構群検出及び調査開始。
12月７日：Ⅳa層小溝状遺構群調査及び遺物取り上げ。
12月８日：Ⅳa層小溝状遺構群全景撮影及び記録作業。
12月９日：東西及び北西壁土層断面観察。下層調査。
12月10日：図面整理作業。
12月13日：調査区埋戻し開始。
12月14日：調査区埋戻し終了。
12月15日：仮設撤去。発掘資機材搬出。周辺清掃。



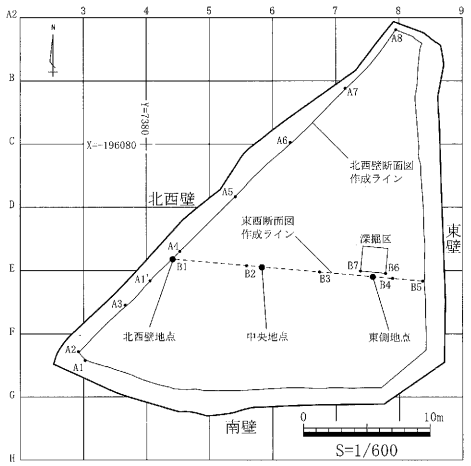
第３図　グリッド配置図

2．基本層位

今回の調査で確認された基本層位はⅠ層からⅨ層まで大別9層、細別12層である。調査区の東側と西側では堆積状況が異なるため、確認調査で得られた成果と本調査における東西土層断面及び北西壁断面の観察結果に基づき、第4図に基本層位柱状図を示した。また、確認調査ではⅠb層、Ⅱ層が確認されている。本調査では当該層が調査対象外であったことから、全面的にⅢ層まで掘削をおこなった。その後、北西壁で基本層位の確認作業をおこなった際には、Ⅰb層、Ⅱ層ともに確認するに至らなかった。



第4図　基本層位柱状図



第5図　断面図作成位置図・深掘区位置図

Ⅰ層：Ⅰa層とⅠb層に細分される。Ⅰa層は盛土であり、層厚60～170cmを測る。調査区の全域に分布し、西側に向かうにつれて厚くなる。Ⅰb層はにぶい黄褐色砂質シルトを主体とする攪乱土。層厚は5～55cmを測る。調査区東側では確認できるが、西側では明確ではない。

Ⅱ層：褐色シルト。層厚は5～10cmを測る。

Ⅲ層：Ⅲa層とⅢb層に細分される。Ⅲa層：にぶい黄褐色シルト。層厚は15～25cmを測り、調査区西側に分布する。Ⅲa層では小溝状遺構群が検出されているが、その埋土とⅢa層の堆積土に違いが見られないことから、この層全体が耕作土の可能性がある。Ⅲb層：にぶい黄褐シルト。層厚は6～11cmを測り、調査区西側を除いて全域に分布している。

Ⅳ層：Ⅳa層とⅣb層に細分される。Ⅳa層：暗褐色シルト。層厚は18～25cmを測り、調査区の南西側から西側にかけて分布する。Ⅳa層でも小溝状遺構群が検出されているが、Ⅲa層と同様に小溝状遺構群の埋土とⅣa層の堆積土に違いが見られないことから、Ⅳa層も層全体が耕作土の可能性がある。Ⅳb層:にぶい黄褐色シルト。層厚は25～30cmを測る。調査区中央から東側にかけて分布し、北側と中央で厚く堆積する。

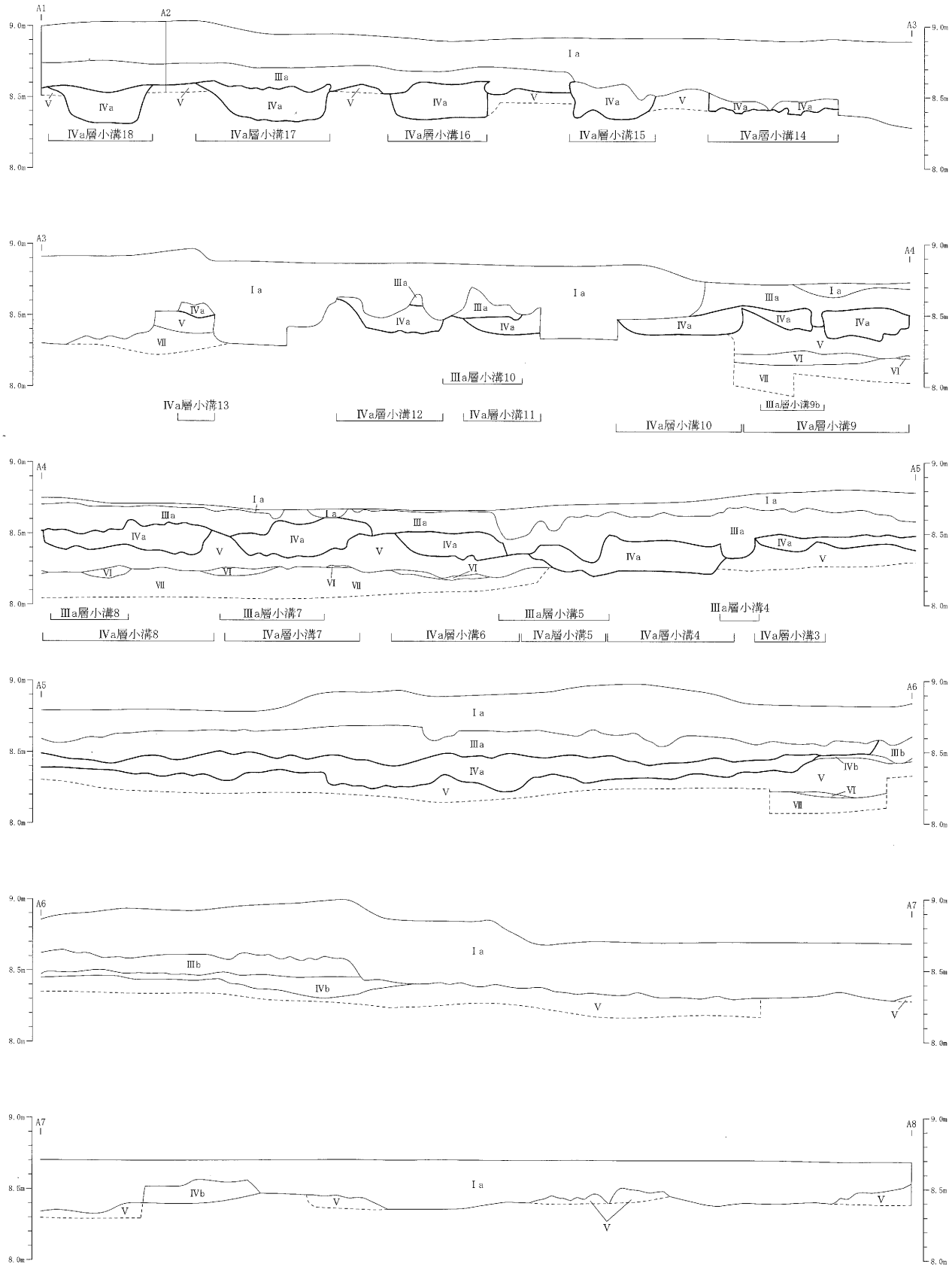
Ⅴ層：にぶい黄褐色粘土質シルト。層厚は5～25cmを測る。調査区のほぼ全域に分布し、東側に向かうにつれて薄くなる様相を呈する。

Ⅵ層：灰黄色シルト。所々で観察されるものの、一定の層厚をもって分布している様子はない。良好な地点で15cm、通常で5～10cmの層厚を測る。

Ⅶ層：黄褐色シルト質粘土。層厚は40～50cmを測り、調査区のほぼ全域に分布している。

Ⅷ層：黄褐色シルト質粘土。層厚は深掘トレンチの所見から20cm程と推定される。

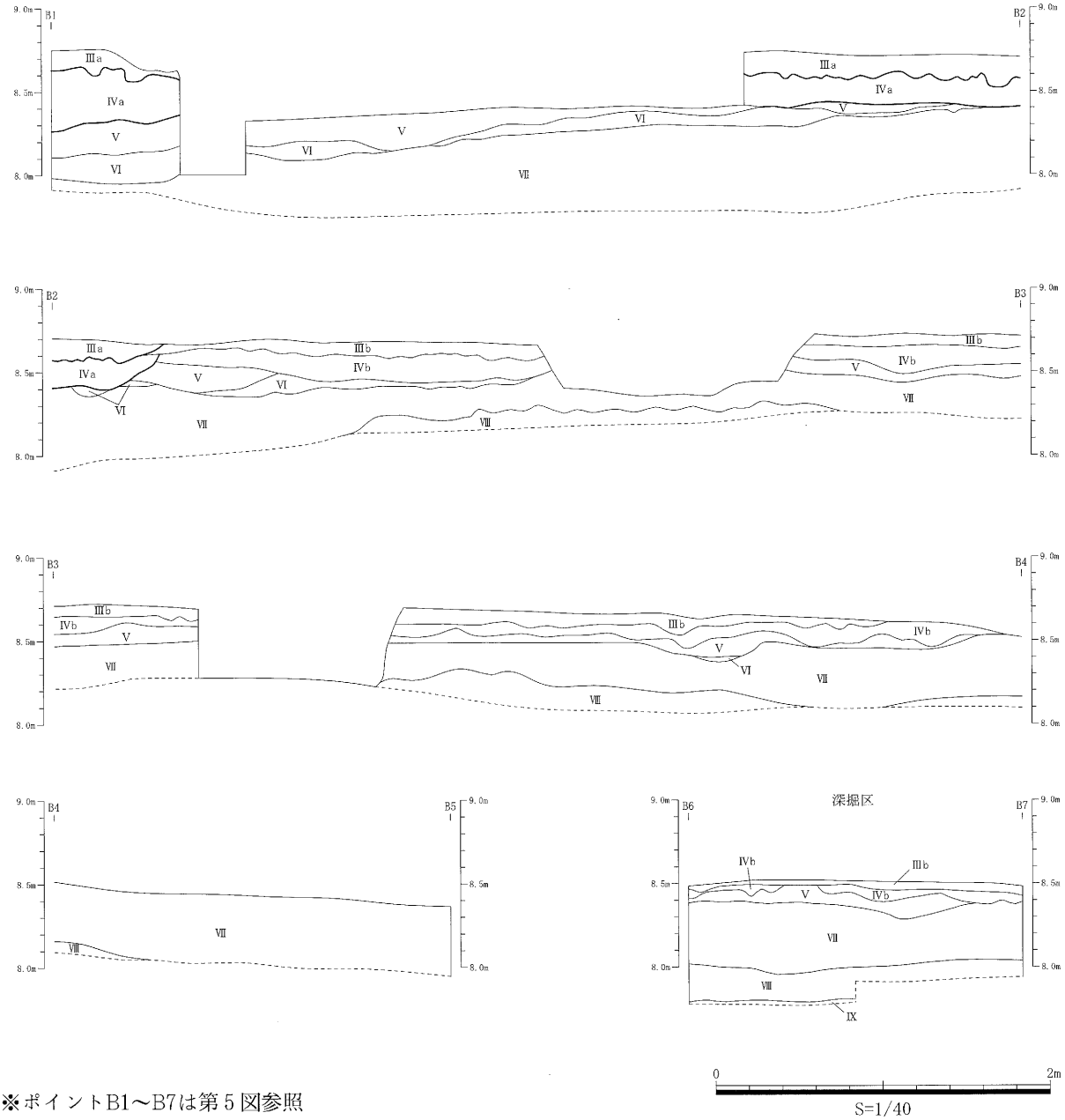
Ⅸ層：黒褐色砂層。



※ポイントA1～A8は第5図参照

S=1/40

第6図　北西壁土層断面図



※ポイントB1～B7は第5図参照

S=1/40

第7図　東西土層断面図・深掘区東西土層断面図

土層註記表

層位	色　調	土　性	しまり	粘　性	備　考
Ⅰa		盛土			礫、コンクリートブロック、植木鉢等を含む
Ⅰb	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	なし	なし	黒褐色土をブロック状に含む
Ⅱ	10YR4/4褐色	シルト	あり	なし	黄褐色土を小さなブロック状に含む
Ⅲa	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト	あり	なし	暗褐色土をブロック状に少量含む
Ⅲb	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	ややあり	なし	Ⅲa層と比べ黒味が強い
Ⅳa	10YR3/3暗褐色	シルト	ややあり	なし	黄褐色土を少量含む
Ⅳb	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト	ややあり	なし	黒色土粒、灰白色土粒など混入物が多い
Ⅴ	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	ややあり	ややあり	灰白色土粒を少量含む
Ⅵ	2.5Y6/2灰黄色	シルト	ややあり	ややあり	やや砂質
Ⅶ	10YR5/6黄褐色	シルト質粘土	あり	あり	灰白色土をブロック状に少量含む
Ⅷ	10YR5/6黄褐色	シルト質粘土	ややあり	ややあり	Ⅶ層と比べ砂の混入量が増加
Ⅸ	10YR3/2黒褐色	砂	ややあり	なし	黄褐色土をブロック状に混入する

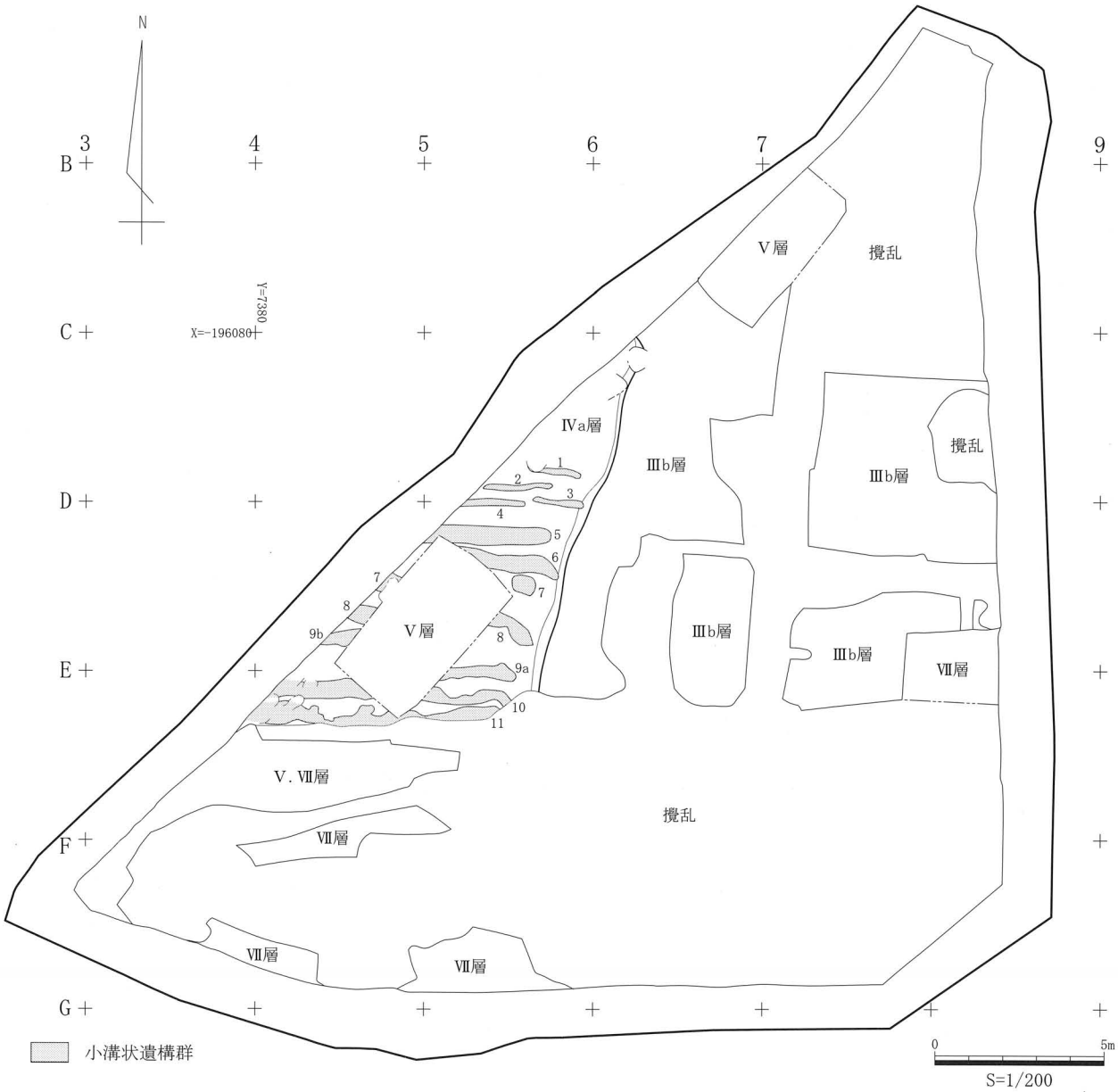
第３章　検出遺構と出土遺物

１．Ⅲａ層の調査

(1) 小溝状遺構群

遺構確認面であるⅢ層上面を精査し、Ⅲａ・Ⅲｂ層を検出した。Ⅲａ層を平面的に掘り下げ、直下層にあたるⅣａ層が部分的に検出された面で精査をおこなったところ、小溝状遺構が11条検出された。なお、確認調査Ｃトレンチでは、遺構確認面をⅣ層まで下げたため、この部分では、小溝のプランは確認されていない。また、その後の検討により、小溝９については２条の小溝の可能性があるため、ここでは小溝９ａ、小溝９ｂと表記した。

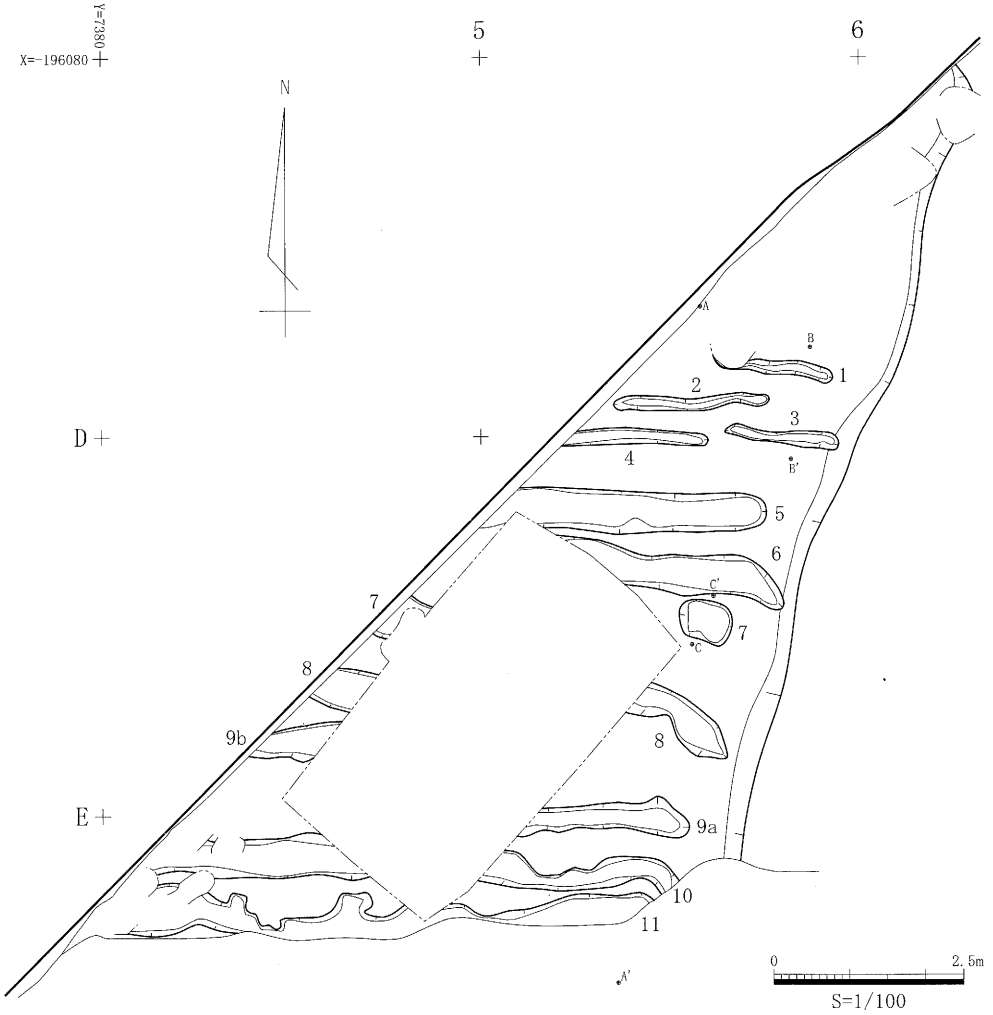
小溝状遺構群は、Ｃ～Ｅ-4～5グリッドに位置し、その範囲は調査区外西側に更に広がると考えられる。各小溝の平面形は溝状を呈し、東西方向に平行する。方向はN-72～93°-E（平均N-84.8°-E）である。小溝３、４は同一の小溝と推定される。上端幅は約30cm～60cm（小溝１～４の平均は17.3cm、小溝５～11の平均は51.5cm）、深さは



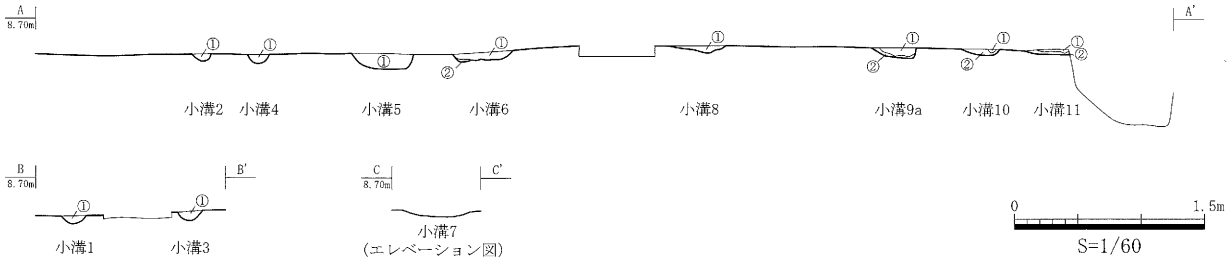
第８図　Ⅲａ層小溝状遺構群検出状況図

約２cm～12cm（平均5.8cm）である。小溝の心心間隔は１～４間で約40cm、上端の残存状況のよい５～６間と10～11間では約80cmである。各小溝の東端は段差の下端に沿うように直線的に揃う。断面形は、浅い「U」字状（小溝１～４，７，８，10）と、逆台形状（小溝５，６，９a，９b，11）を呈し、緩やかに立ち上がる。埋土は基本層Ⅲa層であり、それを細分すると、第10図のように①層と②層に分けられる。②層のほうが色調がやや暗く、下層のブロックを多く含む。底面には不規則な凹凸が多く認められた。底面の標高は小溝１、４、８、11は西から東へ、小溝８は東から西への傾斜がそれぞれ認められる。

各小溝状遺構の埋土は基本層Ⅲa層であり、下部に直下層のⅣa層のブロックが含まれること、底面には不規則な凹凸が多く認められる部分があることなどから、この小溝状遺構群は、基本層Ⅲa層を耕作土とする畑跡の耕作痕（佐藤2000）と考えられる。



第９図　Ⅲa層小溝状遺構群平面図



第10図　Ⅲa層小溝状遺構群断面図

第１表　Ⅲa層小溝状遺構群計測表

溝番号	検出長（m）	上端幅（cm）	下端幅（cm）	深　さ（cm）	方　向	最高値（m）	最低値（m）	傾　き	底面の凹凸
1	(1.56)	16	7	7	N－82°－E	8.325	8.295	西→東	無
2	2.05	16	7	8	N－91°－E	8.362	8.304	平坦	無
3	1.52	17	9	9	N－83°－E	8.353	8.316	東→西	無
4	(1.80)	20	12	7	N－90°－E	8.398	8.332	西→東	無
5	(3.55)	50	36	9	N－90°－E	8.425	8.260	波状	有り
6	(4.45)	44	33	7	N－84°－E	8.412	8.335	波状	有り
7	0.70	51	42	3	N－72°－E	8.425	8.401	平坦	有り
8	(4.65)	43	27	2	N－70°－E	8.517	8.420	波状	有り
9a	(2.05)	38	20	4	N－91°－E	8.497	8.401	西→東	無
9b	(0.85)	41	32	3	N－92°－E	8.350	8.344	平坦	無
10	(6.35)	42	33	4	N－88°－E	8.528	8.382	西→東	有り
11	(6.45)	41	29	4	N－90°－E	8.489	8.404	西→東	有り

※検出長を（　）内で示したものは、調査区内で確認された長さを示す。
最高値・最低値は海抜高を示す。

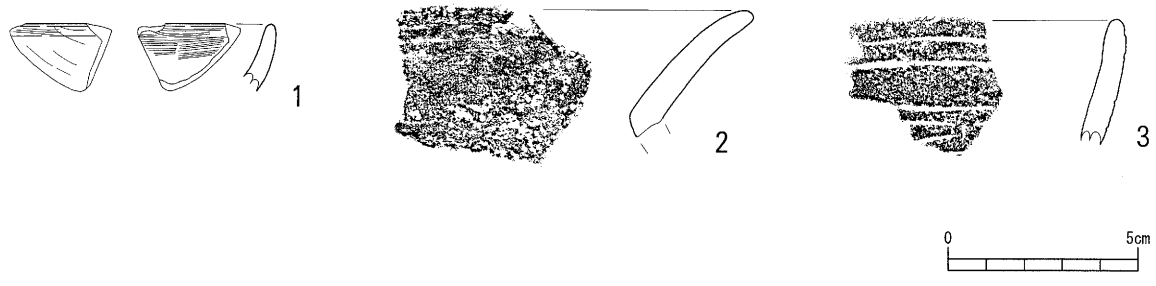
(2) 出土遺物

遺物は総数149点出土しており、土器の小破片が大半を占める。第11図と第12図にそのうち15点を図示した。

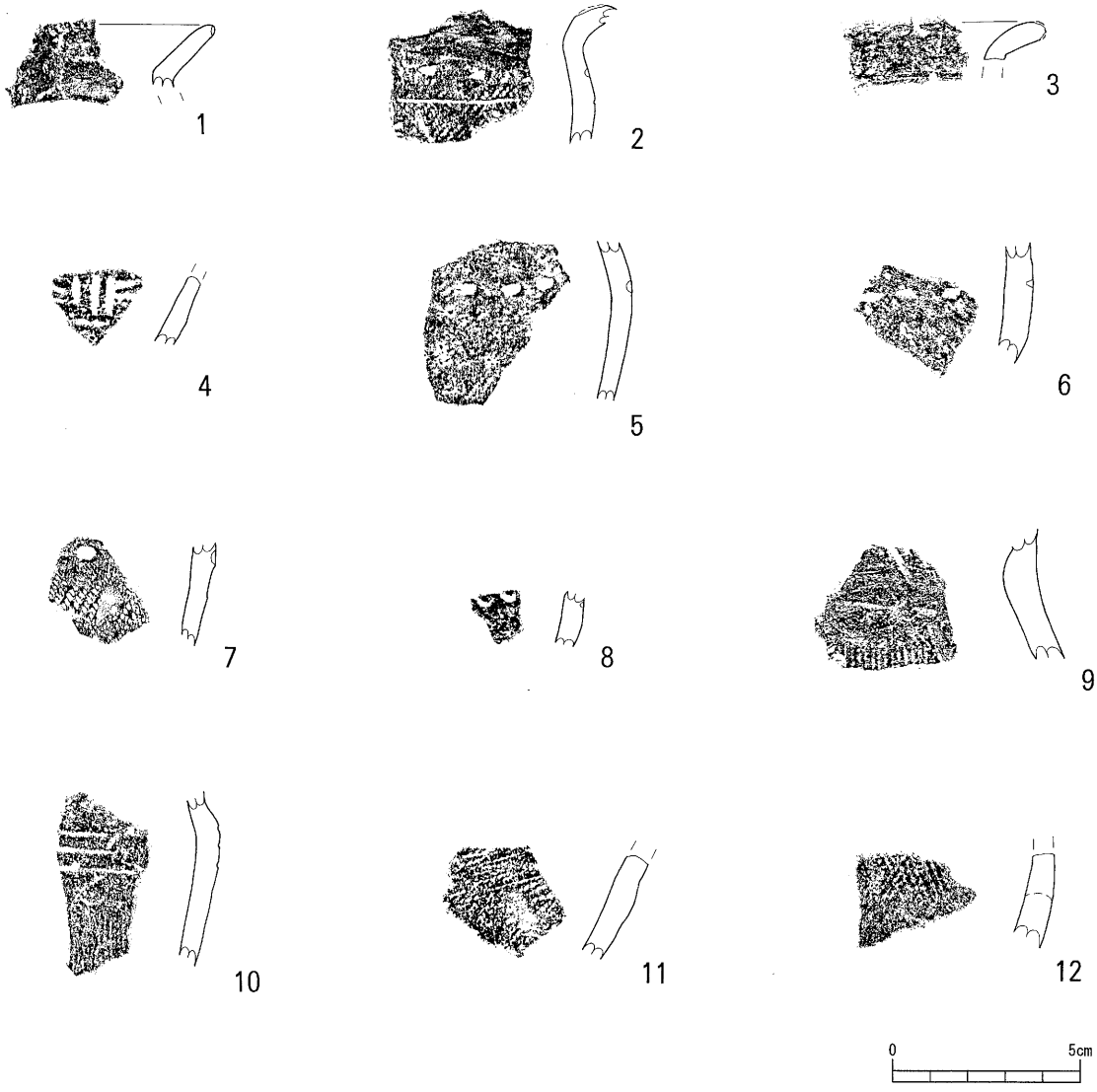
第11図１は土師質土器であり、坏もしくは皿の口縁部破片である。製作にロクロを使用しており、整形後に内外面とも横ナデ調整が施されている。第11図２は土師器で、甕の口縁部破片である。口縁が弱く外反する器形を呈し、外面には左から右方向へ横ナデが施されいる。第11図３、第12図１～12は弥生土器である。第11図３と第12図４は鉢であり、第11図３は弱く内湾しながら外に開く器形を呈する口縁部破片、第12図４は体部破片である。第11図３の外面破片下部には、平行沈線の他にやや斜めの沈線と垂線が観察でき、第12図４も同様に斜めの沈線と３条の垂線が施文されている。第12図１～３は甕の口縁部破片である。第12図２の外面には口縁部と体部を区画するように列点文が施文されている。第12図５～７、９～12は甕の体部破片である。第12図５～７は外面に口縁部と体部を区画するように列点文が施され、第12図５と７は左から右方向に刺突されている。一方、第12図６の刺突方向はほぼ正面からであり、穴の形態も横長の楕円形である。刺突の方法は、穴の中心がやや丸みを帯びて沈んでいることから、細い棒状の道具で刺突をおこなった後に、棒を左右に振って穴の幅を広げたものと考えられる。また、小破片のため器種の特定は不明であるが、第12図８も竹管状の工具で正面より刺突がおこなわれている。その他、特に区画するような施文はおこなわず、体部からそのまま撚糸文が施される資料（第12図９）、列点文の代わりに３条の平行沈線が引かれる資料（第12図10）も出土している。

(3) 遺構の時期

Ⅲa層から出土した遺物の時期は、弥生時代から近世におよび、大半は弥生土器が占めている。それらの中でもっとも新しい時期の遺物は、第11図１の土師質土器である。しかしこの遺物は小破片であることから、その時期を明確にすることは難しい。そのため、Ⅲa層小溝状遺構群の時期は中世～近世にかけてと考えておきたい。



第11図　Ⅲa層出土遺物（1）



Ⅲa層出土遺物観察表

図版番号	登録番号	グリッド	出土状況	種　別	器　種	文　様・調　整		備　　考	写真図版
						外　面	内　面		
第11図1	Ⅰ-1	D-5	小溝5	土師質土器	坏or皿	ロクロ→ナデ	ロクロ→ナデ		写真31-1
第11図2	C-1			土師器	甕	横ナデ			写真31-2
第11図3	B-1	C-5		弥生土器	鉢	変形工字文			写真31-3
第12図1	B-2	E-5		弥生土器	甕？	横ナデ		口唇部に刻目あり	写真31-4
第12図2	B-3	E-5		弥生土器	甕	縄文LR(→沈線)→列点文→横ナデ		刺突方向：左から	写真31-5
第12図3	B-4	D-5		弥生土器	甕	横ナデ	横ナデ？		写真31-6
第12図4	B-5	E-5		弥生土器	鉢	変形工字文			写真31-7
第12図5	B-6	E-5		弥生土器	甕	縄文（不明）→列点文		刺突方向：左から	写真31-8
第12図6	B-7	D-5	小溝9a	弥生土器	甕	縄文（不明）→列点文	ミガキ	刺突方向：正面から刺突後左右に振る	写真31-9
第12図7	B-8	E-5		弥生土器	甕	縄文L{RR→列点文		刺突方向：左から	写真31-10
第12図8	B-9	E-5		弥生土器		列点文（竹管状）		刺突方向：正面から	写真31-11
第12図9	B-10	D-5		弥生土器	甕	撚糸文→横ナデ			写真31-12
第12図10	B-11	D-5		弥生土器	甕	撚糸文→平行沈線			写真31-13
第12図11	B-12	E-5		弥生土器	甕	撚糸文R	ナデ		写真31-14
第12図12	B-13	D-5		弥生土器	甕	撚糸文	ナデ		写真31-15

第12図　Ⅲa層出土遺物（2）

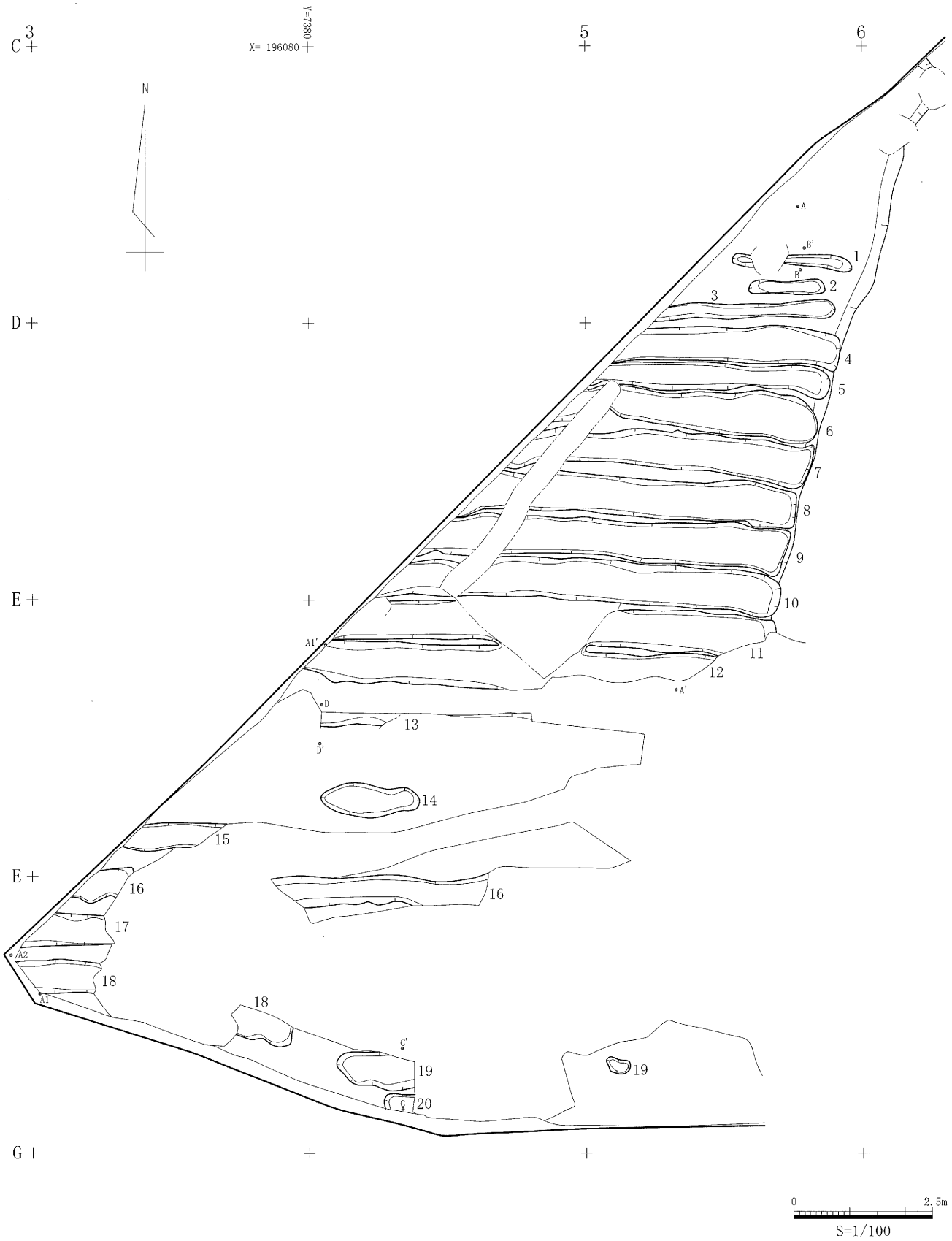
2．Ⅳa層の調査

(1) 小溝状遺構群

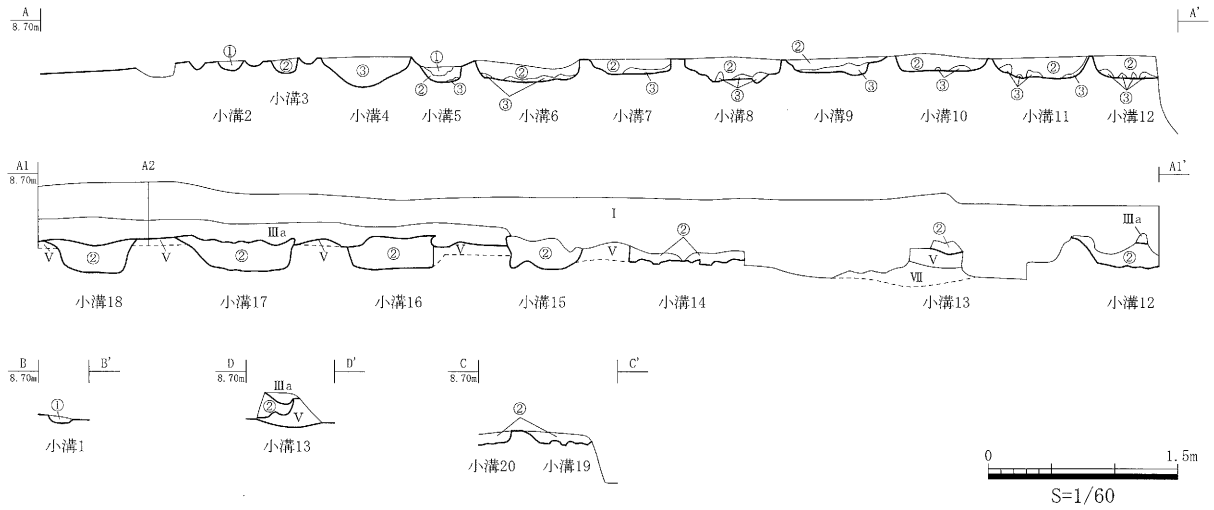
Ⅲ層の調査終了後、Ⅳ層上面を精査し、Ⅳa・Ⅳb層を検出した。Ⅳa層を平面的に掘り下げ、直下層にあたるⅤ層が部分的に検出された面でさらに精査をおこなったところ、小溝状遺構が20条検出された。なお、確認調査Cトレンチでは一部基本層Ⅶ層まで下げているため、その部分では小溝のプランは確認されていない。

小溝状遺構群は、C～F-3～5グリッドに位置し、その範囲は調査区西側へ更に広がると考えられる。各小溝の平面形は溝状を呈し、東西方向に平行する。方向はN-78～91°-E（平均N-87.7°-E）である。上端幅は約30cm～70cm（小溝１～３の平均は23.0cm、小溝４～20の平均は55.4cm）、深さは約10～26cm（平均11.8cm）である。小溝の心心間隔は上端の残存状況のよい１～12で計測したところ、１～３間で約50cm、４～５間で56cm、６～12間で約80cmである。小溝４～11の東端は段差の上端に沿うように直線的に揃う。小溝13以降も同様の可能性がある。断面

第13図　Ⅳa層小溝状遺構群検出状況図



第14図　Ⅳa層小溝状遺構群平面図



第15図　Ⅳa層小溝状遺構群断面図　※セクションA1-A2-A1'は北西壁断面図を再掲。

第２表　Ⅳa層小溝状遺構群計測表

溝番号	検出長（m）	上端幅（cm）	下端幅（cm）	深　さ（cm）	方　向	最高値（m）	最低値（m）	傾　き	底面の凹凸
1	2.15	20	12	8	N－88°－E	8.314	8.143	西→東	無
2	(1.35)	23	18	10	N－90°－E	8.296	8.236	東→西	無
3	(3.10)	26	18	7	N－91°－E	8.340	8.246	西→東	有り
4	(3.70)	63	45	23	N－89°－E	8.255	8.146	平坦	無
5	(4.05)	45	31	17	N－88°－E	8.253	8.174	平坦	有り
6	(4.30)	73	59	14	N－82°－E	8.279	8.186	西→東	無
7	(5.05)	66	50	11	N－85°－E	8.333	8.271	西→東	有り
8	(5.55)	67	57	14	N－86°－E	8.389	8.211	西→東	有り
9	(6.18)	79	65	11	N－87°－E	8.303	8.253	西→東	有り
10	(6.87)	72	55	17	N－85°－E	8.286	8.228	波状	有り
11	(7.65)	70	56	19	N－87°－E	8.310	8.203	西→東	有り
12	(6.98)	60	48	14	N－89°－E	8.375	8.193	西→東	有り
13	(3.98)	18	20	9	N－90°－E	－	－	－	有り
14	1.78	45	23	6	N－90°－E	8.184	8.122	西→東	有り
15	(1.35)	47	37	5	N－89°－E	8.395	8.334	平坦	有り
16	(7.22)	54	40	6	N－88°－E	8.402	8.064	西→東	有り
17	(1.17)	54	43	16	N－86°－E	8.386	8.358	－	有り
18	(4.95)	52	45	10	N－78°－E	8.315	8.123	西→東	有り
19	(5.30)	46	33	8	N－90°－E	8.205	8.105	－	有り
20	(0.53)	31	26	11	N－83°－E	8.150	8.079	－	有り

※検出長を（　）内で示したものは、調査区内で確認された長さを示す。
最高値・最低値は海抜高を示す。

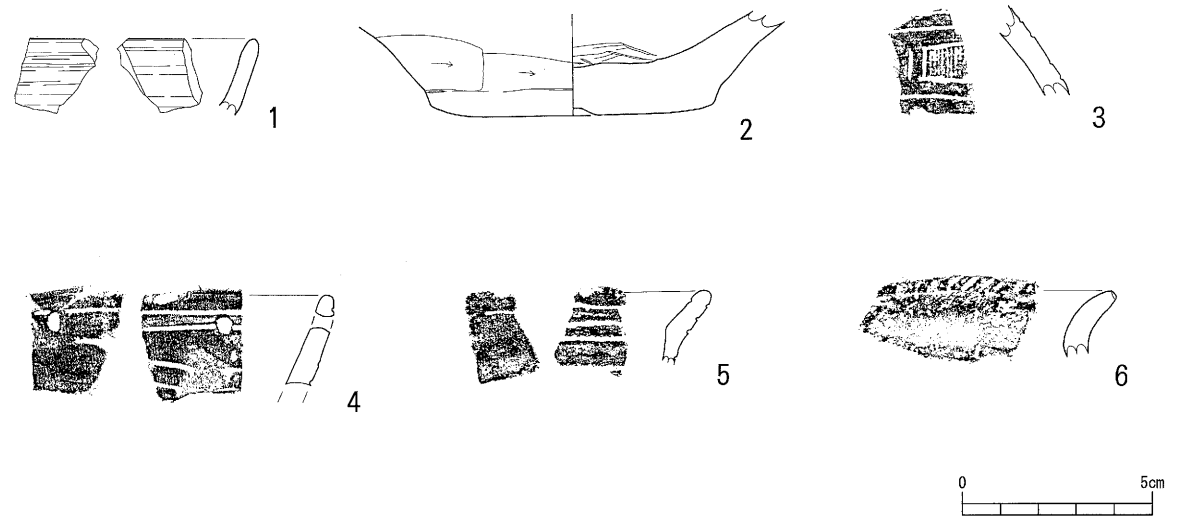
形は浅い「U」字状（小溝１～４）と逆台形状（小溝５～20）を呈し、立ち上がりは急なものが多い。埋土は基本層Ⅳa層であり、それを細分すると第15図のように①層～③層に分けられる。①層に比べて②層の色調が暗く、下層のブロックが多く含まれる。③層は下層のブロックを主体としている。底面は平坦な部分と不規則な凹凸がみられる部分がある。底面の標高は、小溝３、６～９、11、12、18において、わずかに西から東へ傾斜する。

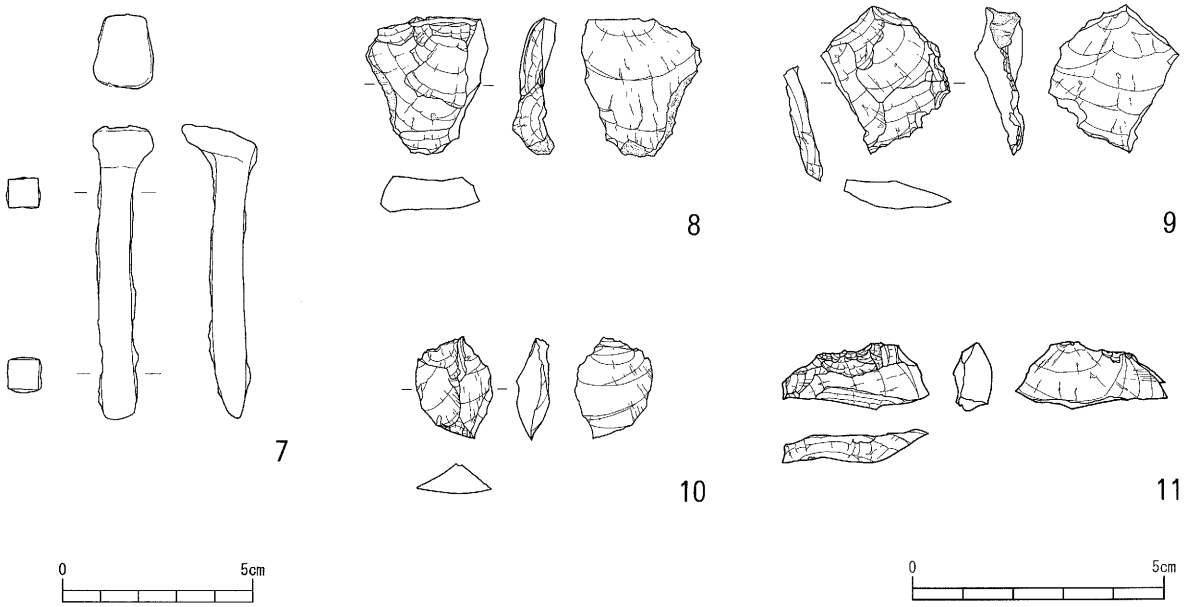
各小溝状遺構の埋土は基本層Ⅳa層であり、下部に直下層のⅤ層のブロックが含まれること、底面には不規則な凹凸が多く認められる部分があることなどから、この小溝状遺構群は、基本層Ⅳa層を耕作土とする畑跡の耕作痕（佐藤2000）と考えられる。

(2) 出土遺物

遺物は総数126点出土しており、土器の小破片が大半を占める。第16図にはそのうち11点を図示した。

第16図１は製作にロクロを使用した土師質土器で、皿の口縁部破片と思われる。体部に比べ器厚が口唇直下でやや厚みを増している。Ⅳa層から出土した遺物で、製作にロクロを使用したものはこの１点のみである。第16図２





IVa層出土遺物観察表

図版番号	登録番号	グリッド	出土状況	種別	器種	文様・調整		備考	写真図版
						外面	内面		
第16図1	I-2	E-5	小溝11	土師質土器	皿	ロクロ	ロクロ		写真32-1
第16図2	C-2	D-4	小溝7	土師器		ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ	内面にヘラ痕あり	写真32-2
第16図3	B-14	E-4	小溝12	弥生土器	壺or鉢	沈線→植物茎回転文→ミガキ			写真32-3
第16図4	B-15	D-5	小溝10	弥生土器	鉢	変形工字文→穿孔(2×3mm)	沈線・ミガキ	貫通孔あり	写真32-4
第16図5	B-16	F-4	小溝19	弥生土器	鉢	平行沈線・ミガキ	沈線・ミガキ		写真32-5
第16図6	B-17	E-4	小溝12	弥生土器	甕	横ナデ	横ナデ	口唇部に刻目あり	写真32-6

図版番号	登録番号	グリッド	出土状況	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	写真図版
第16図7	N-1	D-5	小溝7	角釘	7.9	2.2	1.7	36.27	先端部折れ・皆折釘	写真32-7
第16図8	K-1	D-5	小溝9	剥片	2.9	2.3	1.0	5.51	流紋岩・両面に褐鉄鉱の付着有り	写真32-8
第16図9	K-2	D-5	小溝10	二次加工のある剥片	3.0	2.8	0.8	4.26	流紋岩・右側縁折れ	写真32-9
第16図10	K-3	E-4	小溝13	二次加工のある剥片	2.0	1.5	0.6	1.43	黒曜石・打点部折れ	写真32-10
第16図11	K-4	E-4	小溝12	剥片	1.3	2.9	0.7	2.4	黒曜石・先端側折れ	写真32-11

第16図　IVa層出土遺物

は土師器の底部破片である。底面はヘラケズリがおこなわれ平坦である。また内面の調整は工具痕が残されていることから、ヘラケズリののちに部分的なナデがおこなわれたと考えられる。第16図３～６は弥生土器である。第16図３は壺もしくは鉢の体部破片であり、沈線で方形に区画した内側に植物茎回転文を施文している。第16図４と５は鉢の口縁部破片で、４は口縁部が弱く内湾している。外面には２条の平行沈線と山形文が施され、内面にも１条の沈線が施文されている。また、口唇部直下に外面と内面の両側から穿孔されている。外面はやや右斜め下から、内面は下方から刺突がおこなわれた痕跡が確認できる。第16図５は破片の下部が屈曲していることから体部と口縁部の境にくびれがある器形を呈していたと思われる。内外面にミガキが施され、外面には４条、内面には一条の沈線が施文されている。第16図６は甕の口縁部破片である。口唇部に上からヘラ状工具による斜めの刻みが施されている。内外面ともに横ナデ調整が施されている。第16図７の鉄製品は基部を折り曲げて頭とする皆折釘である（後藤1996）。先端側が腐食により欠損している。第16図８と10は剥片で、第16図９と10は二次加工のある剥片である。９は右側縁に、11は先端部に加工が施されている。石材は８と９が流紋岩、10と11が黒曜石を使用している。また、９の背面及び腹面には褐鉄鉱の付着が認められる。

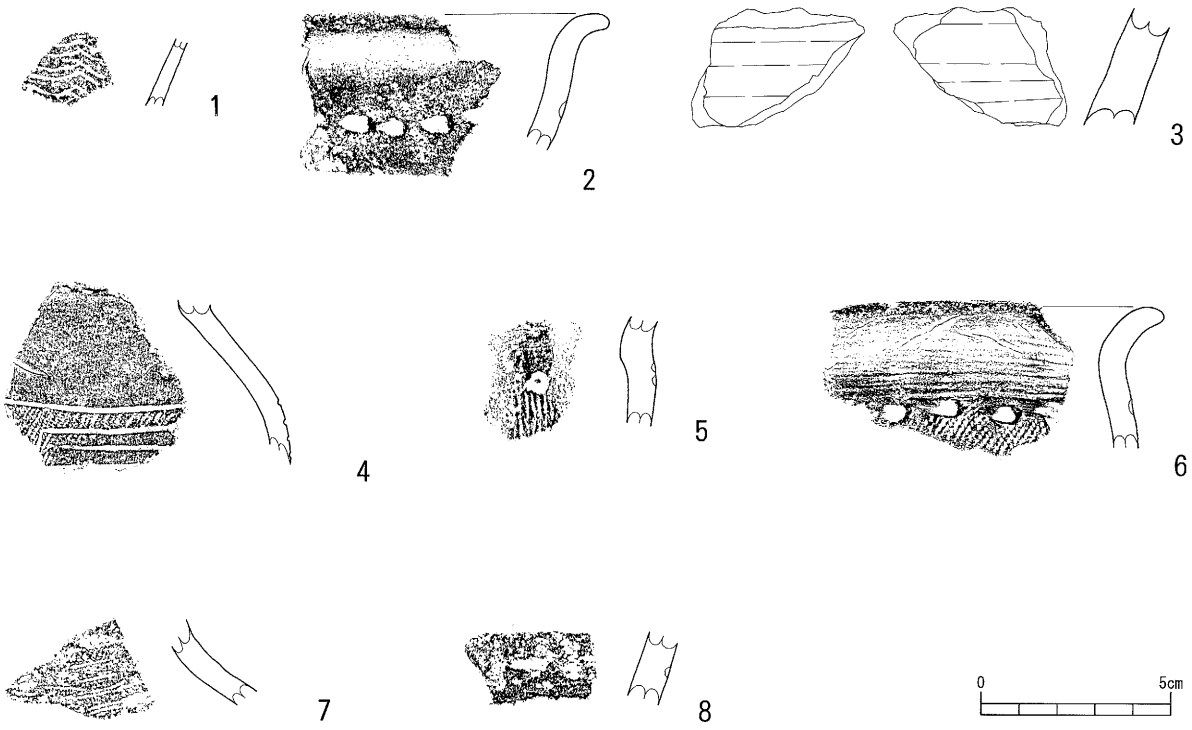
(3) 遺構の時期

Ⅳa層から出土した遺物の時期は、弥生時代から近世におよび、大半は弥生土器が占めている。それらの中でもっとも新しい時期の遺物は、第16図１の土師質土器、第16図７の角釘である。しかし、土師質土器は小破片であること、角釘には時期幅があることから個々の時期を明確にすることは難しい。そのため、Ⅳa層小溝状遺構群の時期は中世～近世にかけてと考えておきたい。

３．遺構外出土遺物

今回の調査地点ではⅠa層からⅣb層まで遺物が出土している。基本層Ⅲa層と基本層Ⅳa層を除いた遺物総数は、表面採集資料を含め、計105点である。第17図にはそのうち８点を図示した。第17図１と２はⅠb層から出土した弥生土器である。１は鉢もしくは壺の体部破片である。外面には沈線が二本一描で施文されている。内面はミガキが施されている。２は甕の口縁部破片で、内外面とも横ナデ調整が施されている。また、外面には口縁部と体部を区画するように列点文が施されているが、体部に地文が施文された痕跡は認められない。第17図３はⅢb層から出土した土師質土器で、製作にロクロを使用した火鉢の体部破片である。色調は灰黄褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。内面には煤の付着が認められる。第17図４～６はⅣb層から出土した弥生土器である。第17図４は壺の体部破片である。外面は沈線により方形に区画し、その内部に縄文を施している。第17図５と６は甕の口縁部破片である。外面は口縁部にナデ調整、体部には縄文及び撚糸文が施され、列点文によりその境を区画している。特に第17図５は刺突の工具に竹管を使用した痕跡が認められる。内面はミガキがおこなわれている。

第17図７と８は今回の調査区西側に隣接した地点で採集された弥生土器である。第17図７は壺の頸部破片で、外面には撚糸文が施されている。胎土に白色砂粒を顕著に含み、外面は黒褐色、内面は黄褐色を呈する。第17図８は甕の体部破片である。外面に刺突が施されており、刺突痕は横長の楕円形を呈する。刺突は左方向から沈線を引くような要領で施文されたと思われる。



遺構外遺物観察表

図版番号	登録番号	グリッド	層位	種別	器種	文様・調整		備考	写真図版
						外面	内面		
第17図1	B-18		Ib層	弥生土器	鉢or壺	波状文	ミガキ	沈線（二本一描）	写真32-12
第17図2	B-19		IborⅡ層	弥生土器	甕	横ナデ・列点文	ミガキ	刺突方向:左から	写真32-13
第17図3	I-3	C-8	Ⅲb層	土師質土器	鉢	ロクロ	ロクロ	火鉢・煤付着あり	写真32-14
第17図4	B-20	B-6	Ⅳb層	弥生土器	壺	平行沈線(四角文) →縄文L{RRR→ミガキ	ミガキ		写真32-15
第17図5	B-21	D-5	Ⅳb層	弥生土器	甕	撚糸文→刺突→ナデ	横ナデ→ミガキ	裏面に有段	写真32-16
第17図6	B-22	D-5	Ⅳb層	弥生土器	甕	横ナデ→列点文→縄文L{RR	ミガキ	刺突方向:左から	写真32-17
第17図7	B-23		Ⅰ層	弥生土器	壺	撚糸文	横ナデ	表採	写真32-18
第17図8	B-24		Ⅰ層	弥生土器	甕	列点文		表採・刺突方向：左から	写真32-19

第17図　遺構外出土遺物

第3表　基本層位出土遺物数量表

基本層位	弥生土器	土師器	土師質土器	不明土器	磁器・陶器	石器	鉄製品	合計
表土	13	1	1	2	2	0	0	19
Ⅰa層	1	1	0	1	0	0	0	3
Ⅰb層	13	6	1	11	0	0	1	32
Ⅱ層	0	2	0	1	0	0	0	3
Ⅲa層	68	15	3	61	0	2	0	149
Ⅲb層	9	4	1	8	0	0	0	22
Ⅳa層	48	10	1	58	0	8	1	126
Ⅳb層	12	1	0	13	0	0	0	26
合計	164	40	7	155	2	10	2	380

第4章　総　　括

南小泉第43次調査では、中世から近世にかけての畑跡と考えられる小溝状遺構群が基本層Ⅲa層とⅣa層において検出された。両小溝状遺構群の走向は東西を基本とし、調査区外の西方へ展開している。溝幅はⅢa層小溝遺構群が約40㎝前後（小溝１～４は除く）、Ⅳa層小溝状遺構群が約50～70㎝である。特に、Ⅳa層小溝状遺構群は溝方向及び形状ともに斉一的で溝間隔が非常に狭い。

南小泉遺跡ではこれまでの調査で昭和52年の第１次調査をはじめとして、第７・14・18・21・25・26・27・30・31次調査で小溝状遺構が検出されている。時期は古墳時代から奈良・平安時代の調査例が多く、検出された地点の位置に偏りはない。小溝状遺構の方向は、東西（第１・21・31・43次調査）、南北（第７・14・18）、東西と南北のように複数時期（第25・26・30次調査）が認められる。これら小溝状遺構の溝長や深さは調査区によって多少の違いがあるものの、溝幅に関しては約30㎝前後と共通性が認められる。今回の調査で検出された小溝状遺構群は、Ⅲa層小溝状遺構群が約45㎝、Ⅳa層小溝状遺構群が約70㎝とこれまでの検出例と比べ幅広である。この溝幅に関する相違は、時期による違いが想定される。

出土遺物は弥生土器が大半であった。南小泉遺跡では弥生土器はほとんどの調査で出土しているが、比較的まとまって出土したのは第10・11・12・16次調査においてである。それらの弥生土器は前期から後期まで弥生時代を通じて確認されている。今回の調査で出土した弥生土器は中期中葉の桝形囲式が多く見られ、これまでの南小泉遺跡及び周辺遺跡の傾向を確認する結果となった。

以上、今回の調査では、中世から近世にかけての小溝状遺構群が検出され、これまでの南小泉遺跡ではこの時期の明確な検出例はないことから、貴重な成果となった。

引用文献

後藤順一 1996「上水施設の釘に関する一考察」『汐留遺跡』第３分冊 汐留地区遺跡調査会

佐藤甲二 2000「畑跡の耕作痕に関する問題点と今後の課題仙台市域の調査事例をとおして」『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集 第１集

参考文献

仙台市教育委員会 1995『下ノ内浦遺跡 第５次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第202集

仙台市教育委員会 2000『高田B遺跡』 仙台市文化財調査報告書第242集

仙台市教育委員会 1996『中在家南遺跡他 仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第213集

仙台市教育委員会 1978『南小泉遺跡 範囲確認調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第13集

仙台市教育委員会 1983『南小泉遺跡 第10次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第60集

仙台市教育委員会 1984『南小泉遺跡 都市計画街路工事関係第３次調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第68集

仙台市教育委員会 1985『南小泉遺跡 第12次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第80集

仙台市教育委員会 1987『南小泉遺跡 第14次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第109集

仙台市教育委員会 1990『南小泉遺跡 第16～18次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第140集

仙台市教育委員会 1994『南小泉遺跡 第22次・第23次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第192集

仙台市教育委員会 1998『南小泉遺跡 第26次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第225集

仙台市教育委員会 1998『南小泉遺跡 第30・31次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第226集

仙台市史編さん委員会 1994『仙台市史 特別編１ 自然』 仙台市

仙台市史編さん委員会 1994『仙台市史 特別編２ 考古資料』 仙台市

馬目順一・阿部義平 1987「東北の弥生土器」『弥生文化の研究４ 弥生土器Ⅱ』 雄山閣

写真１　Ⅲａ層小溝状遺構群検出状況（北から）

写真２　Ⅳａ層小溝状遺構群検出状況（南西から）

写真 3　Ⅲ a 層小溝状遺構群完掘状況（南西から）

写真 4　Ⅲ a 層小溝 1 ～ 4 完掘状況（西から）

写真 5　Ⅲ a 層小溝 5 ～ 8 完掘状況（西から）

写真 6　Ⅲ a 層小溝 9a, 9b, 10, 11完掘状況（西から）

写真 7　作業風景

写真８　Ⅳａ層小溝状遺構群完掘状況（北から）

写真９　Ⅳａ層小溝１～５完掘状況（西から）

写真10　Ⅳａ層小溝６～９完掘状況（西から）

写真11　Ⅳａ層小溝10～13完掘状況（西から）

写真12　Ⅳａ層小溝14～20完掘状況（西から）

写真13　Ⅲａ・Ⅳａ層小溝状遺構群北西壁土層断面（北東から）

写真14　北西壁基本層位（１）（南東から）

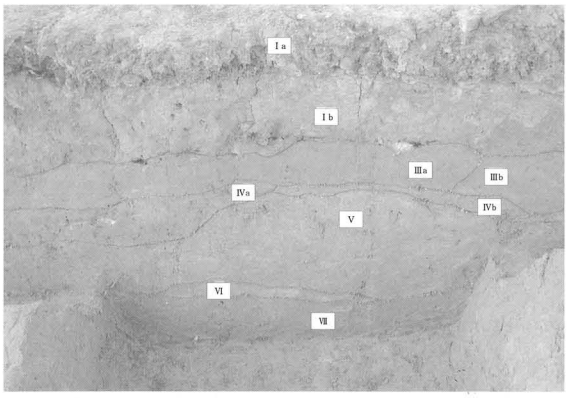


写真15　北西壁基本層位（２）（南東から）

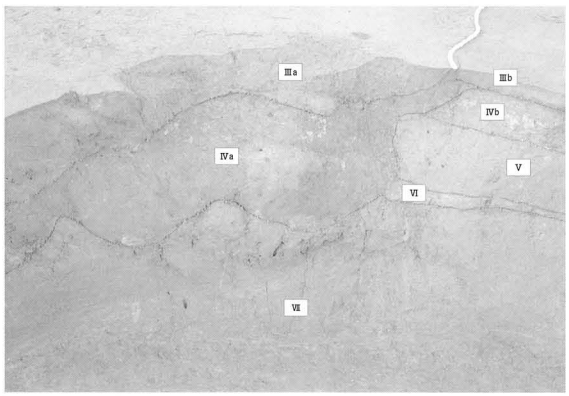


写真16　東西基本層位（南から）

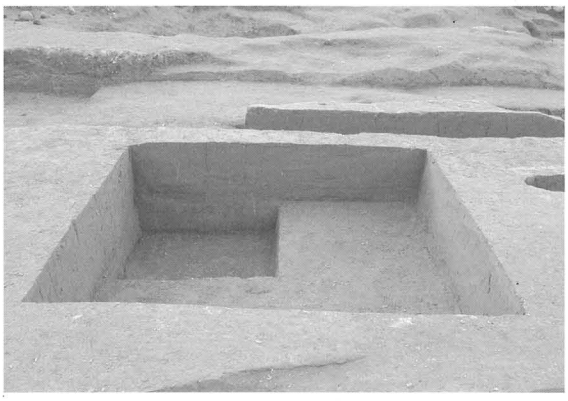


写真17　深掘区東西土層断面（北から）

写真18　北西壁土層断面１（南東から）

写真19　北西壁土層断面２（南東から）

写真20　北西壁土層断面３（南東から）

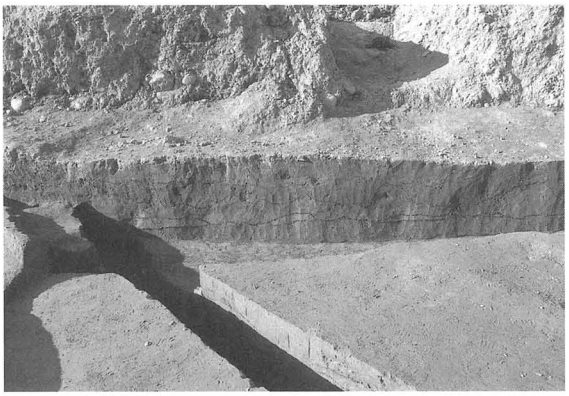


写真21　北西壁土層断面４（南東から）

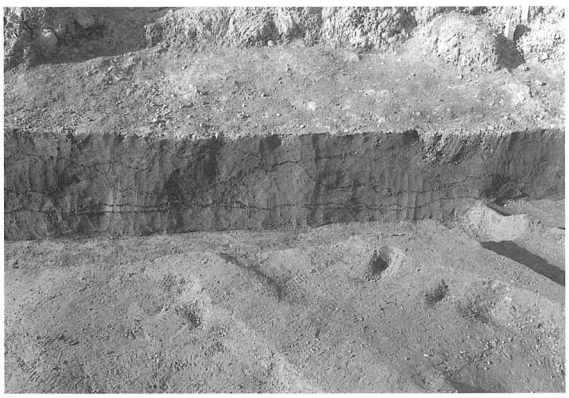
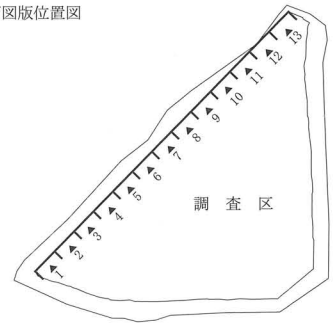


写真22　北西壁土層断面５（南東から）

写真23　北西壁土層断面６（南東から）

写真24　北西壁土層断面７（南東から）

北西壁断面図版位置図



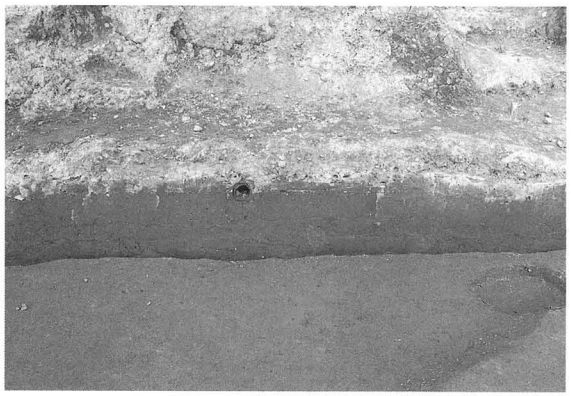


写真25　北西壁土層断面 8 （南東から）

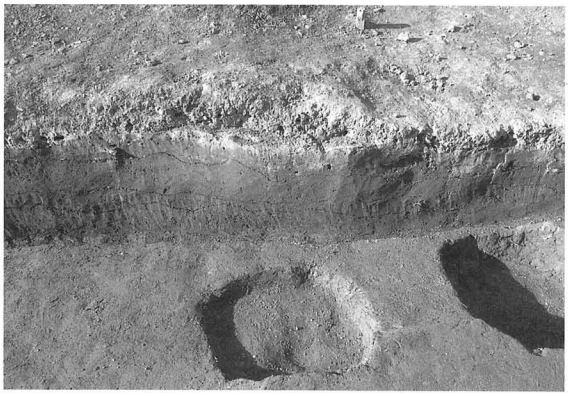


写真26　北西壁土層断面 9 （南東から）

写真27　北西壁土層断面10（南東から）

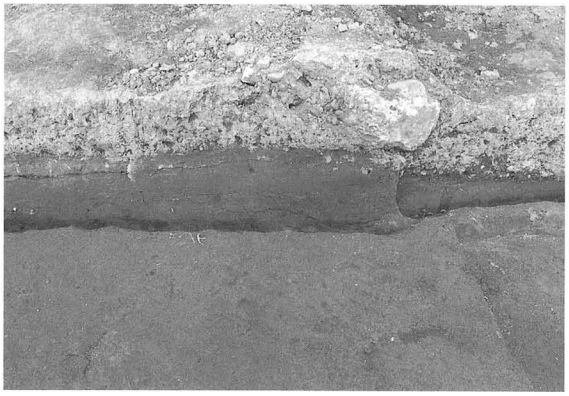
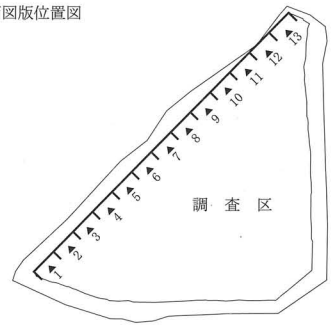


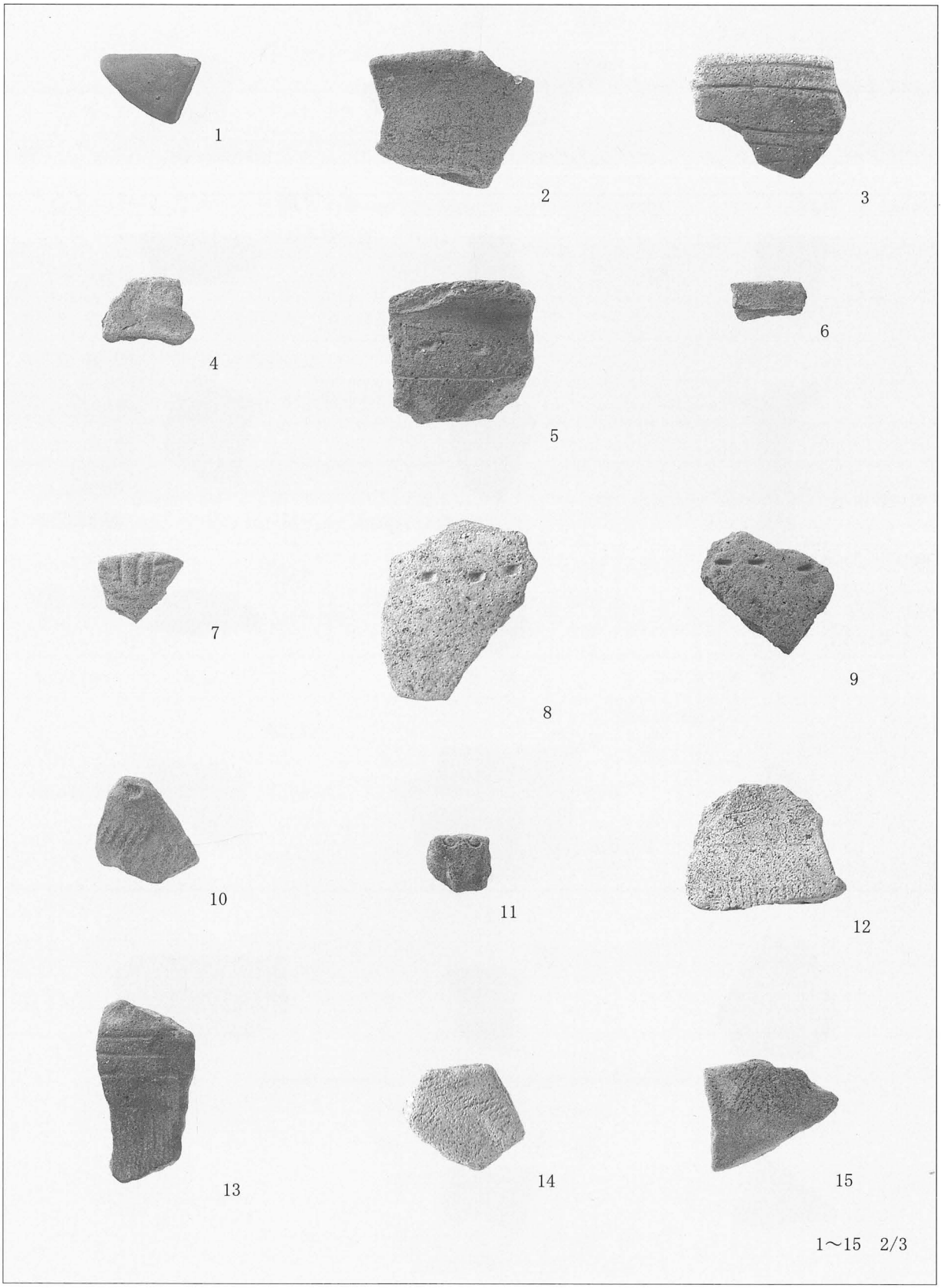
写真28　北西壁土層断面11（南東から）

写真29　北西壁土層断面12（南東から）

写真30　北西壁土層断面13（南東から）

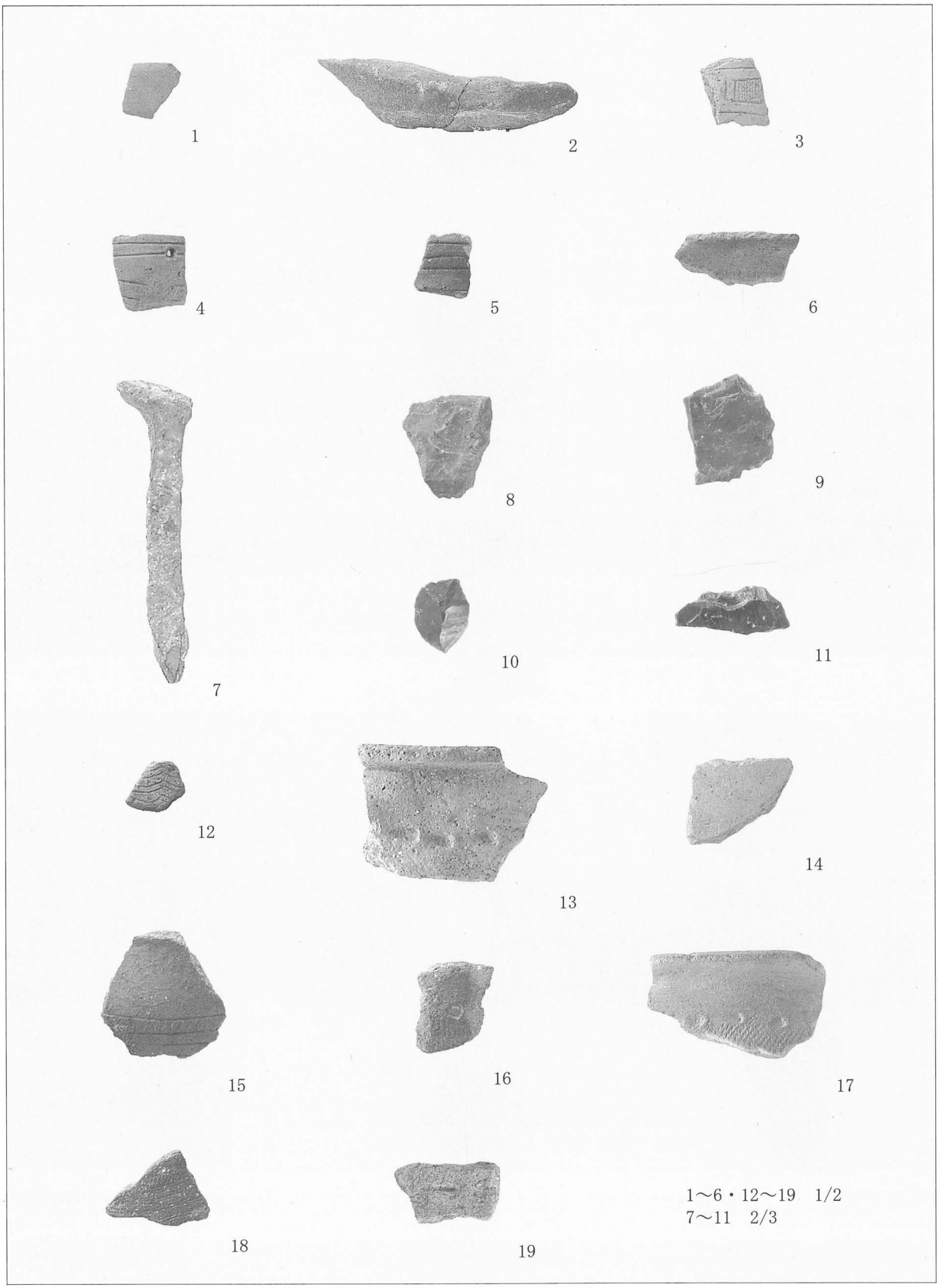
北西壁断面図版位置図





1. I-1（第11図-1） 2. C-1（第11図-2） 3. B-1（第11図-3） 4. B-2（第12図-1） 5. B-3（第12図-2）
6. B-4（第12図-3） 7. B-5（第12図-4） 8. B-6（第12図-5） 9. B-7（第12図-6） 10. B-8（第12図-7）
11. B-9（第12図-8） 12. B-10（第12図-9） 13. B-11（第12図-10） 14. B-12（第12図-11） 15. B-13（第12図-12）

写真31　出土遺物（1）



1. I-2（第16図-1） 2. C-2（第16図-2） 3. B-14（第16図-3） 4. B-15（第16図-4） 5. B-16（第16図-5）
6. B-17（第16図-6） 7. N-1（第16図-7） 8. K-1（第16図-8） 9. K-2（第16図-9） 10. K-3（第16図-10）
11. K-4（第16図-11） 12. B-18（第17図-1） 13. B-19（第17図-2） 14. I-3（第17図-3） 15. B-20（第17図-4）
16. B-21（第17図-5） 17. B-22（第17図-6） 18. B-23（第17図-7） 19. B-24（第17図-8）

写真32　出土遺物（2）

報 告 書 抄 録

ふりがな	みなみこいずみいせき
書名	南小泉遺跡
副書名	第43次発掘調査報告書
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第293集
編著者名	斎野裕彦・戸堀　功・内田　仁
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町３丁目7-1　TEL 022-214-8893～8894
発行年月	2005年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みなみこいずみいせき 南小泉遺跡	せんだいしわかばやしく 仙台市若林区 とおみづかひがしほか 遠見塚東159-3, 71-5外	04100	宮城県 01021 仙台市 C-102	38度 13分 59秒	140度 55分 03秒	2004.11.10 ～ 2004.12.15	425㎡	仙台市若林障害者福祉センター建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南小泉遺跡	集落跡 畑跡	弥生時代		弥生土器（中期） 石器	
		古墳時代		土師器	
		中世・近世	小溝状遺構群（畑跡）	土師質土器 鉄製品	

仙台市文化財調査報告第293集

南 小 泉 遺 跡

―第43次発掘調査報告書―

2005年３月

発行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目７－１

文化財課　022(214)8893

印刷　システム印刷株式会社

日野市高幡1012-13

TEL 042-591-1411